

---

# 夢でまたあいましょう

芥子

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

夢でまたあいましょう

### 【Zマーク】

Z6482C

### 【作者名】

芥子

### 【あらすじ】

健はどうにでもいる小学生ただ違うといえば夏休みが嫌いという事ぐらいだ、宿題を早く終わらせ毎日寝ていると、不思議な夢を見た、

単調な毎日をさらに単調にする期間・・・それが夏休みだ

僕は毎年この期間が一番嫌いだったかも知れない、学校が休みというのは嬉しいがこれと言つて楽しいこともなくただ暇な日々が繰り返されると思っていた

あの事が起きるまでは

7月の下旬、僕は9時過ぎに目を覚ました。外は太陽が照り続きセミの声が嫌ほど聞こえてくる

そんな中寝ぼけた顔で僕は朝食のコーンフレークを食べていた  
両親は共働きで起きたら一人ともおらず、姉は多分部活についているのだろう

家はガランとしており、セミの声だけが聞こえるその音を消すため  
テレビをつけた

テレビではニュースが流れしており、聞いたことのない村の川で溺れた子供を助けたニュースに、少女が行方不明になつたという内容が報道されていた

毎年夏になつたら流れるニュースだなと思つた

テレビの電源を切りコーンフレークの牛乳を飲み干すと僕は部屋に戻つた

やるこじはない、宿題はもうすでにやり終えた、暇を弄ぶ僕はとりあえず寝ることとした

クーラーをつけたもう一眠りにつく

思ったより寝つきが良く気がついたら寝ていた・・・

『 いじはなど 』・・・・・

見たことのない公園、遊具とかおいてあるようなではなく散歩道みたいな公園でとてもキレイに整備されている、  
とつあえず歩いてみる、ひたすら歩くが誰一人として会わない、さらによいていると後ろから

『 すいません 』

と声をかけられた、内心驚いたが後ろを振り向くと同じ年ぐらいの  
女の子が立っていた

『 まさか、ここに人が来るなんて思つてもいなかつた 』

彼女はビックリした様子で彼女は言った

僕は漂流していく救助された気分だった

『 あのココは一体どこなんですか 』

僕は真っ先に彼女に聞いてみた、彼女は首を横にふり知らないと答

えた

『 ロロからでられなくなつたうぢうひよつ』  
『ひみこてうひよつ』

焦つてゐる僕に対し彼女は

『それなら簡単よ』

と言つた

『じうひよつ』

と聞くと

『 ううで話すよつ向ううで話さなこ?』

と彼女は屋根のついた休憩所を指差した

確かにここは暑い、とつて事で聞きたい事は山積みだが、我慢して休憩所に向かつた

その休憩所は木の屋根に木のベンチ、それにテーブルまであった、ベンチに座ると僕は真つ先にあの質問をした

『どうしたらここから出れるの?』

『その内わかるよ

と聞いた瞬間、急に彼女が歪んでみえた、といつよつ景色全体が薄

くなっていた

ベットから起き上がる僕、時間を見ると2時間経過していた

『良かつた夢だつたんだ・・・それにしてもあの子可愛かつたな』

なんだか急に胸が熱くなつた・・・また会いたいそう思えた  
深呼吸をし、もう一度寝ることを決意した、寝起きといふ事もあり  
簡単に眠りについた

またしても同じ公園の休憩所、そこには彼女がキヨトンとした顔で  
ベンチに座つていた

『また来たの・・・?』

僕は少し恥ずかしくなつた

『けど会いにきてくれてうれしいな、なにかお話しよ』

彼女が嬉しそうにやう言つた、僕は一つ返事でOKをした

『君は名前なんて言つの?..』

『僕の名前は健一・・・健康一番つて覚えて』

『おもしろい覚え方~私は恵、メグって呼んでね』

健『そういうえばメグちゃんは健一に住んでるの~まさか!~じやない  
よね?』

恵『当たり前でしょ、私は 県の〇〇つて所に住んでるの』

健『え！？隣県！…僕は 市つて所に住んでるだけどそこ知つてますか？』

恵『うん知ってるよ、確かにそこには大学病院があるよね、私ここで入院してたの』

健『へえそなんだすごい偶然だね』

その後の話で、メグは僕より一つ年上で、幼少の時病弱で今でもたまに入院しているという事を聞いた

そして何気ない会話、夏休みが楽しいというメグ、僕はとりあえずあいづちを打ったが僕は夏休みが好きになれない

両親は共働きで旅行にいった事などない、それに友人も少ないからあんまり遊ばないからだ

けれどここでメグとしゃべっている時間はとても楽しかった

この時間がずっと続ければいいのにと思った瞬間メグが薄く見えてきた、帰りの時間だ

僕はメグにバイバイと言い手を振った

目が覚める・・・あれからまた2時間が経過していた

起きて冷蔵庫から麦茶を飲み冷静考る

今思えばこれは僕の夢で、僕の意識のみで構成されてる、メグは現実には存在しないのだろう

なんだか急に切くなつた、メグは夢の中でしか会えない・・・

けれど夢の中で会えるならもう一度寝よう。

ベットに入り寝ようとしだが目を瞑つても寝れずに夜になつていて両親が帰つてきて夕食をとる、そして夜になり眠りについたが、ついにメグの夢は見れなつたが

何日か過ぎ朝寝るとあの公園に行く夢を見ることがわかつた

時間によつてはメグがいない時もあつた、いつもの休憩所でメグと会つたときに聞くとメグも僕がいない時があるといつ

多分、それは僕が寝ていない時で一人とも寝ているときのみ会えるのだと確信した

僕は無理やり寝てているのだがメグは今は入院をしており朝も寝ているのだといつ

それはメグは実在しているといつ事で僕は内心ですごく喜んだ

恵『健君・・・すゞく嬉しそうだね、何かあったの?』

『いや・・・まあそれなりにいいことがあったから

恵『そ、うなんだけ好きな女子でもできたの?』

健『違ひよ』

照れ隠しだと気づかれないようになつてなく言った

恵『本当に? 確かに健君でキスもした事なさそうだもんね』

僕は思わず噴出したじゃあメグはあるのかと聞くとメグは

恵『私はあるよ、健君、私とキスする?』と言つてきた

僕は胸がドキドキした僕は、バカにするなど言い放つとメグは顔が赤いよと言い笑い出した

なんとも楽しい一時、これが現実ならどれだけ幸せだらう、いつの間にかメグに恋心を抱いていくよになつた

これほど寝るのが楽しいと思えた事がない

もうメグと会つて10日が過ぎようとしていた

僕は朝寝るのが日課となっていた、そして今日もメグとの会話のはずだったが今日の夢は違つた

僕が家から出て行き、自転車でどこに向かう夢、ひたすら自転車を漕ぎどこかに目指している、見覚えがある風景

そしてせりて漕ぐと、こつもの公園に着いたといひで夢が覚めた

この日からメグと会う回数より自転車を漕いで公園に行く夢の方が  
多くなった

その事をメグに話すといきなり黙り込んだ

最近メグの顔色がすゞしく悪い、元々病弱だからすゞしく心配だ

色々話し僕が帰ろうとするとメグが

『健君と会えてすくよかつたよ！実は私健君の事・・・』

そこで田を覚ました、僕はすくメグと会いたいといつ衝動に駆られた

次の日僕はついにその公園まで行くことを決意した、何回も夢を見続けたことでその道を完璧に把握したのだ

自転車にまたがりひたすら漕ぐ、夢で見た景色を次々と越えていく

一時間ほど漕いだらどうか、そこは町外れで公園のある場所についたがそこは公園ではなく広い空き地だった

『確かにこじだよな・・・？』

僕はその空き地を見渡したそしたら空き家が一軒あった、僕はなんとなくその空き家に入る

扉を開けると廊下は長年使われたことがなさそうで古い雑誌が散乱していた

そして部屋のドアをあけると・・・

埃まみれの部屋、ベットの上に女の子が縛られた状態で寝かされていた

メグだ、顔はよく見えなかつたがなんとなくそんな気がした

近づくと田隠しをされ、両手を縄で縛られている僕はそれらを解いた  
メグは気絶もしくは睡眠薬か何かで眠らされているのだろうか、ぐ  
つたりとしている

負ぶつてゐるメグからかすかに心臓の音がするのが唯一の救いだった

僕はそのまま小屋から逃げ出し警察に行きいきさつを話した

それから駆けつけた警察により犯人が逮捕された、犯人は食料の買  
出しにいつておりあの時小屋にいなかつたらしい、本当に運が良か  
つた

次の日からやれ警察やメグの両親から感謝の言葉をいただいた。

新聞社にも色々追いかけられた

暇だつた僕の夏休みは一瞬にして慌しくなつたが

残念な事にあれ以来公園の夢は見なくなつた

どうやらメグはあれから心労などが重なり病院に戻つたらしいが見

舞いにいけるよつな状況ではないらしい。

そりやそだらうあんなショックな出来事があつたのだから

それから2週間が経ち、夏休みも終わりかけの頃、僕はいつもどおり寝ていたら急に見覚えがある風景がてきた。メグと出会った最初の公園だ

僕はベンチの方へ走つていった。そこにはまたしても見覚えがある女の子が座っていたメグだ

「メグ！..」

僕がそう叫んだ、するとメグは振り返つた。あの時と変わらないメグの姿

「健君・・・本当にありがどもし健君がいなければ私・・・もつとひどい目に合つてたと思う、もう私大丈夫だから・・・その明日お見舞いに来てくれるかな？」

僕はすぐに首をたてにブンブンと振つた。

次の日すぐに自転車にまたがり隣の市へ向かつた、この押さえ切れない気持ちと共に

＜終＞

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6482c/>

---

夢でまたあいましょう

2010年10月11日02時15分発行